総合科目「女性学入門」実施の概要

コーディネーター（文学部）　中　野　節　子

Repont on "Introduction to Women's Studies"

NAKANO Setsuko (Faculty of Letters)

1．開講の経緯

総合科目「女性学入門」が開講されたのは1995年（平成７年）度からで，97年度前期の開講で３回目である。全国的にみて，80年代後半の頃は国立４年制大学における女性学関連科目の開講はほんの数校程度であったが，93年の調査発表（５年毎に発表）では37校が開講，その内総合科目としての開講は22校であった。その普及は極めて急速で，本学での開講は決して早いものではない。

知られているように，女性学という学問分野はアメリカで発生したものである。60年代の，女性差別も含む様々な差別の解消を目指す市民権運動の展開の後に，70年代には女性の解放を目指した「女性学」が学問分野として市民権を得，そして，各大学における女性学講座の設立や女性学の開講が極一般的なこととなったのである。女性学講座などに関しては，日本はその影響を受けてから約20年を要したことになる。

女性差別を生みだしてきた性に対する偏向した認識は，社会の歴史と共に古く，社会・文化のあらゆる部分で重層的に形成されている。従って，女性学は学際的な学問分野として，様々な角度から，新しい切口で問題対象に切り込んでいく必要が要請されている。総合科目実施以前の数年間，中野は単独で「女性解放理論と歴史」のタイトルで女性学関連の授業を行なっていた。しかし，単独で女性学の内容を紹介していくには，極めて限界が大きかったことは当然で，できれば多くの教官の参加による女性学の開講が望ましかった。教養課程に，幸いそれに対応できる総合科目の制度が設けられたので，開講を計画した。

女性学に興味を示す女性教官は多かったので，いくつかの分野で授業を担当してくれる教官が快く呼び掛けに応じてくれ，開講にこぎつけることができた。ただし，授業構成上，２つの不十分さがあった。一つは，女性学は一般に社会学が中心になるというものの，文系，理系，芸術も含む分野で成り立っているが，ここでは文系の教官のみとなったこと，二つには，女性学は女性のみでなく社会全体のものであり，男性教官の授業担当も望まれたが，差し当たっては女性教官のみの構成となったことである。もっと時間をかけて取り組めば，内容も幅広くかつ男性教官も含めたより豊かな授業になったと今でも思っている。

まとまった内容を話すには，２コマ以上の講義が必要であろうとの考えから，担当教官は５ないし６名とした。過去３回の開講で，教官とその担当分野に一，二の相違はあるがほぼ同様で，社会学，心理学，国際文化比較，文学，法学，歴史学の分野に渡っている。97年度は５名の教官が担当し，表１のような授業を行った。

開講に先立って行われた打合せにおいて特に若手の教官から，女性学の成立の原動力となった，女性差別の解消や女性解放などに授業目標を設定するということより，女性という性が社会・文化にどのように反映されているかを学問的に紹介していこうという雰囲気が強かった。それはある意味では，女性解放の現時点での成果であるし（女性差別をそれほど認識しなくと

表1　97年度「女性学入門」担当者・テーマ一覧（敬称略）

担当回	担当者名	所　　属	講　義　の　テ　ー　マ
1	中野　節子	文　学　部	科目ガイダンス
2	高橋　涼子	法　学　部	女性学の成立
3・4	和泉　邦子	文　学　部	フェミニズムと言語表現
5～7	中野　節子	文　学　部	歴史の中の女性
8・9	南　　相瓔	経　済　学　部	日本の農村における「外国人妻」の言語文化問題
10・11	松下美知子	留学生センター	女性の生涯発達心理学
12・13	高橋　涼子	法　学　部	精神分析の中の家族と女性
14	中野　節子	文　学　部	総　括

も良い時代になった)，現時点での学生の要望に答えるものと考えられた。従って，その点においては各教官の自由裁量に任せ，むしろ講義内容に重なりのないような調整を行なうことを中心とした。

2．学生の受講状況

過去3年間の受講生は，192，246，247名と推移し，97年度は男性86，女性161名で，約3名に1名が男性であった。男性は徐々に増える傾向にある。受講生は全学部に渡っているが，講義内容が文系のためであろうが文系学部の受講生が多い。97年度の学部別受講生は，文・42，法・38，経・46，教育・64，理・9，医・21，薬・11，工・16の内訳である。1年生が多いが，2年生以上の受講も少なくはない。本講座では，啓蒙的な意味もあるので（「女性学」というものが何であるかを知ってほしい)，あまり受講制限をしない方針をとっている。啓蒙的な趣旨を生かすために出席を重視し，各教官2～3回担当のうち出欠を1回とってもらうことにしており，従って5～6回の調査となる。1年生の出席率は高いが，2年以上では殆ど出席しない学生もいる。担当教官の中には熱心な学生だけを100名程度に絞って受講させたほうがよいとする意見も出てきている。

3．評価の方法

担当の教官，従って5ないし6名がそれぞれ問題を1題出し，学生にはそのうち2題選択させる。選択された教官が採点するが，50点満点で30点を合否の境とし，2題の点数を合計して成績判定を行なう。その際，出席も全般的に考慮するが，特に合否の境にいるような学生に対して参考にしている。学生の問題選択にはかなりの偏りがあり，採点における負担に関しては教官により大きな差があるが，この点は今のところやむを得ないこととして了解してもらっている。

4．学生の反応

97年度の授業の最後に，今後の参考にいくつかの質問に答えてもらったが，ここでは女性学に関するイメージの，受講前後の変化について少し紹介しておこう。回答数，男性58名，女性148名で，受講前に「女性学」について知らなかった，或は殆ど知らなかった女子学生が25名，男子学生20名，受講前後で「女性学」に関するイメージに変化がない，或は殆ど変化がない女子学生が25名，男子学生14名であった。約5分の1の学生が初めて女性学にふれる機会を持ったわけで，また，約5分の4の学生が受講後に女性学へのイメージを変化させている。

具体的な学生の意見を紹介すると，まず男子学生において，受講前は女性の被害者意識を述べるもの，ないしは劣等感の裏返しの女性至上主義的な内容かと考えていたが，受講後は，人間全体を扱うものだとわかったとか，女性への理解が深まったというものがいくつか見られた。その他に，受講前に先輩から「女性の優位点を並べ立てるので男が聞いていると嫌んなっちゃ

表2　98年度「ジェンダー学入門」担当者・テーマ一覧（敬称略）

担当回	担当者名	所　　属	講　義　の　テ　ー　マ
1	中野　節子	文　学　部	科目ガイダンス
2	高橋　涼子	法　学　部	ジェンダー学の成立
3・4	中野　節子	文　学　部	歴史にみるジェンダー
5・6	高橋　涼子	法　学　部	家族の中のジェンダー
7	綿引　伴子	教　育　学　部	教育の中のジェンダー
8・9	松下美知子	留学生センター	女性の生涯発達心理学
10	西平　直喜	学　　外	伝記からみた女性生涯発達研究
11・12	青野　　透	法　学　部	人工生殖と女性
13	南　　相瓔	経　済　学　部	日本の農村における「外国人妻」の言語文化問題
14	中野　節子	文　学　部	総　括

うかもしれない授業」と聞かされていたが，受講後は「割と普通」だと思った，「男子禁制の授業」から変わって「むしろ人間学」と思った，「男性としての自分」も考えねばならぬことだと思った，男が聞いてもためになる授業だと思った，男性としての自分の見解からでは考えられなかった角度から考えられた，などの意見があった。

女性の場合，女性だけの学問かと思っていたとか（これと共通するのが，男子学生が多いのに驚いたという意見），抑圧されてきた女性の立場や女性の社会進出を強調するものかと思っていたが，男性の問題点も考えて，人間としての生き方を考えるものだと知ったというものと（これは男性と共通），領域が広く奥の深い学問だとの印象を持ったというものがわりあい多かった。他には，性的・肉体的なことを扱うのかと思ったが社会的にも女性を取り上げるのだと分かった，男性女性の両者に対し偏向がなく「フェア」だった，女性に団結して立ち上がれと訴えるようなものではなかったなどが見られた。幾人かの学生はテレビでみた田嶋陽子氏の意見や，ジャーナリズムが書くウーマン・リブと女性学を重ねてみていたと述べている。彼女たちは一様に，そうではなかったとの見方の変化を書き加えている。

講義の内容を否定的に見る見解は少数ながらあった。男女共に，興味を持てるかと思ったが，面白くなかった（抽象的でポイントが分からない），結局結論のでない学問だとわかったとか，受講前の印象通りやはり被害者意識のある授業内容だったとの意見などである。

5．今後の展望

女性学は女性の解放を目指すという観点から成立したものの，最近は男性も含む人間の性一般に関わる文化や社会を考える学問となってきた。97年度の授業はその流れを受けて，女性学というより人間学として，性に関する文化・社会的な考え方が人間の実在にどう影響を与えるかという観点を意識した授業を行なうようにした。授業でも，女性の性のみでなく，男性も含めた人間の性の観念に注目する必要と，女性学における今後の人間学への展望を述べてきた。学生の感想をみると，その点に影響を受けた様子が明白で，好感を持って，女性学とは人間学なのだという認識を強めた学生が多かった。従って，98年度は講座名も「女性学入門」から「ジェンダー学入門」へと展開させることにした。男性教官２名（学内１名，学外１名）に加わってもらって，女性教官も人間学をより意識して授業を行なうことにしている（表２参照）。今後は98年度の結果を踏まえて，いわゆる男性学の観点をより多く取り込んだ授業に変化させていけたらと考えている。